

# カントリー・ハウスにみるホームの変遷

——ギヤスケル夫人、トマス・ハーディ、  
E. M. フォースターとイングリッシュネス——

金子幸男

## I. 序論

時代のグローバルな傾向、特に多数の移民の流入を反映してか、イギリス／イングランドのアイデンティティを問う Englishness のテーマは、ここ数十年、人文・社会科学の分野で活発な議論が展開されてきている<sup>1</sup>。本論文で扱う三作家は、いずれもヴィクトリア朝前・後半、エドワード朝を代表する作家であり、「イングランドの状況小説」、イングリッシュネスに関わる小説を書いたと言ってよい。ギヤスケルは産業化に伴う資本家と労働者階級の対立の問題に加え、鉄道などの科学技術が象徴する近代が緩やかに田舎に変化をもたらしている様子を描き、ハーディはイングランド南部の田舎において近代化により古い田園／農村風景が変質し、民衆文化が消えゆく様子を記録している。フォースターも国内の都市問題、揺らぐ大英帝国の状況を田舎に反映させた小説を書いている。スタンリー・ボールドウィンが言うように、田舎はイングランドのナショナル・アイデンティティの本質であると言えるが (Giles & Middleton 97-102)、本論文では特に田舎のカントリー・ハウスを取りあげる。

カントリー・ハウスが、イングリッシュネス分析に役立つのは、それが社会学者、A.D. スミスがいうホームにあたるからである。スミスはナショナル・アイデンティティの要素として、① An historic territory, or homeland ② Common myths and historical memories ③ A common, mass public culture ④ Common legal rights and duties for all members ⑤ A common economy with territorial mobility for members の五つをあげている。カントリー・ハウスは、homeland、これを日本語でホームと呼んでおろすが、それに相当する。ホームとは、家庭、故郷、母国を表す広い概念で、土地の精神とも関係する言葉だ。カントリー・ハウスは上流階級の貴族やジェントリーの一家、一族が住むホームであると同時に、地方や国レベルで権力を行使する際の拠点となるお屋敷でもある。エドモンド・バークを引くまでもなく、国家と同一視することができるのである。

本論文の目的は、カントリー・ハウスというホームの変遷をイングリッシュネスという観点から三人の作家の作品にたどることである。変遷という際に注目すべき点は二つある。誰が住むのにふさわしいのか（相続の問題）、カントリー・ハウスに住む者にふさわしい活動とは何か（地主の義務）ということである。まずは、いくつか分析のための準備をする。

17世紀末名誉革命以後～1930年代までのカントリー・ハウスをめぐる社会的・文化的状況について、マーク・ジルアードとピーター・マンドラーの著作に依拠して概観したい。

① 〈内戦～18世紀ジョージアン時代～ロマン派の時代——コスモポリタン文化、上流趣味の時代〉

17世紀の内戦から18世紀ジョージアン時代にかけては、地主階級は富と権力の点で群を抜き、歴史や過去に対する関心が薄れた時代で、いわば古典主義全盛のコスモポリタンの時代であった。カントリー・ハウスはパワーハウスであっても国民的アイコンになることはなかった。

② 〈1815-70：ナショナル・カルチャーとしてのカントリー・ハウス成立の時代〉

ナポレオン戦争終結後の50年あまり、革命や民衆の暴動に対する恐怖から、墮落と傲慢を非難されていた上流階級は、中産階級の道徳意識を取り入れ、カントリー・ハウスはジルアードのいう「モーラル・ハウス」(Moral House)へと変化する。『妻たちと娘たち』はちょうどこの時期にあたる。中産階級は、貴族の果たした過去の役割を認め、カントリー・ハウスを一種の国民文化、国民遺産とみなして訪問する。特にチューダー朝およびスチュアート朝にヴィクトリア朝の理想的ジェントルマンの住む屋敷を想像し、Olden Time House に人気が集まる。

③ 〈1870年-1914年：貴族・ジェントリー受難の時代〉

70年代から第一次大戦までは、貴族・ジェントリー階級とカントリー・ハウスに対するバッシングの時代である。70年代からの30年におよぶ長い農業不況と、アメリカとドイツの経済的追い上げ、相続税の導入により上流階級は経済的に困窮。国民文化、国民遺産としてのカントリー・ハウス観には、大衆文化の隆盛と趣味やレジャーの多様化により疑問符がつく。大方のハーディの小説はこの時期の出版である。

④ 〈大戦間期：郊外化とコテージへの移行〉

大戦間期とあるが、1910年出版の『ハワーズ・エンド』にも該当する点がある。

第一次大戦後は、相続税の引き上げ、土地所有の民主化により、上流階級は田舎の土地屋敷を手放し、小土地所有者の増加を見る。他方、都市の中産階級は田舎の土地屋敷を購入、郊外が成立する。この郊外は、昔風の村の体裁を取りながら、領主や農民はいない。スポーツに興じ、教会ではなくシネマに通う。中産階級の郊外居住者は、チューダー朝ヨーマンの家をモデルにハーフティンバー、オーク梁 (half-timbering, oak beams) などを採用、ヨーマンのコテージに、中産階級家庭の独立を尊ぶ気風にふさわしいモデルを見て取ったのである。

さらに、相続の問題と地主の義務の問題を考えるために、カントリー・ハウス・ポエムのコンヴェンションに注目し、お屋敷の当主に期待される資質、活動について考える。カントリー・ハウス・ポエムの先駆けであるベン・ジョンソンの“*To Penshurst*” (1616) と批評家マルカム・ケルサルを参照すれば、次のようなコンヴェンションを引き出すことができる。①屋敷のご当主とその夫人を賞賛、特に夫人は場所の精神 (高貴さ、貞節、豊饒のシンボル) とみなされる ②ホスピタリティの義務と顕示 ③敷地内の自然の豊饒さゆえに、パークとガーデンを賛美 ④共同体の調和に寄与 (一番上から下まで仲がよい) ⑤屋敷の中を見て回り、ホールやギャラリー (祖先の肖像画) などを紹介。

さらには、カントリー・ハウス、すなわちイングランドを相続するのにふさわしい者かどうかを見る視点として、改良 (improvement) を取りあげる。改良とは、荒地や占有されていない土地の囲い込みや耕作により土地に付加価値を付け加えることである (the enclosure and cultivation of wasteland or unoccupied land) (OED. 2-b)。囲い込みについては、W.G. ホスキンスは、開放耕地、荒地、森林、共有地の囲い込みの例をあげている。「ペンズハースト」では、自然は人間が手を加えずとも、進んで大地の恵みをさし出すのだが、リアリズムの小説になると、囲い込み、耕作、排水などの改良により土地の生産性をあげ、領民の繁栄にも寄与することで、有能な地主なのかどうかを判断することができる。改良が風景改良の場合には、地主の美的センスをも測ることができる。

## II. ギヤスケル夫人

まずはギヤスケル夫人を見てゆこう。ここでは上流階級とそのお屋敷が前景化されている『妻たちと娘たち』を取りあげる<sup>2</sup>。この小説では上流階級は中産階級の力をうまく使って時代を泳ぎきっていくようだ。ここに登場するのは、伯爵のカム

ナー家（ホイッグ）と、スクワイアのハムリー家（トーリー）である。カムナー家は安定しており、ホリングフォード卿に体现されているように新しい科学技術をも抵抗なく受け入れる。また、ハムリー家は古い保守的家系を誇りとしながらも、モリー・ギブソンというプロフェッショナルな階級に属する女性を次男ロジャーの嫁に迎え入れるようであり、長男オズボーンとフランス女性エメとの間にできた子供を受け入れるという、新しい血による再生を図ることも示唆されて物語が終わる。

『妻たちと娘たち』ではコンヴェンションである「ホスピタリティ」、「共同体の調和」に資するものとしてパターンナリズムという観点からみてゆく<sup>3</sup>。

まず、パターンナリズムとは何か。それは田舎の地主階級と被支配階級の間に存在するだけではない、広い概念である。ロバーツによれば、それは地主階級だけではなく、産業の指導者（Captain of Industry）、聖職者、下院議員、治安判事、公務員、新聞の編集者、小説家、詩人、大学の学監が実践し、さらには、農業労働者、熟練工、貧民が上記の者たちに抱いている慣習的な尊敬の念であると言う（1）。特にギヤスケルのこの作品についてみれば、地主階級とその領民が共有している社会的な態度と言っていいだろう。そのような態度を、波多野は次のようにまとめている。① 高い身分の者は恵まれない者の面倒をみる義務があるとするノブレス・オブリージュの理念 ② 権威主義的、階層社会を神の創造物として肯定、おのおのが神に与えられた地位を甘受 ③ 「顔と顔」を合わせる「個人的」接触により、身分が異なる者たちが社会的絆を結ぶことで「有機的」な社会が存在できる。

カントリー・ハウスの住人として、貴族やスクワイアなどの上流階級をどう評価するか、それは彼らが上流にふさわしい、パターンナリズムや改良などの義務を果たしているかどうかによって決まる。

まずは、カムナー家であるが、時代設定としては、1832年の選挙法改正前の20年代であることから、大地主のカムナー卿夫妻が住むカントリー・ハウス、タワーズが支配する町、ホリングフォードには、封建的な雰囲気漂っている。よってカムナー卿夫妻は町の人々（vassals）に善行を施し、「腰が低い、思慮深い、やさしい」（condescending, thoughtful and kind）（3）と表現されていることから、領民にはパターンナリズムであり、町の繁栄に寄与してきたということが分かる。

パターンナリズムの例をあげてみよう。ふつうの地主とは違い、カムナー卿は、土地管理人任せにせず、自分で領地を見に行き、領地の農業に問題がないかどうか、テナント・ファーマー（農場経営者）に自分で質問し、地所を管理運営していく。この姿勢はテナント側の高い評価を受ける（3）。また、テナントの暮らしぶりを気

遣い、誕生、結婚、死に関心をもち、顔を忘れない、さらにチャリティに積極的であることもうかがえる(552)。このようにカムナー卿のパターナリズムは肯定され、カムナー家とその拠点タワーズが地方の繁栄に貢献している立派な地主貴族一家、カントリー・ハウスであることが読者にはわかる。『説得』のサー・ウォルター・エリオットとは対極にあると言えよう。カムナー伯爵夫人のパターナリズムも、ホリングフォードで慈善学校らしきもの(70)を経営し、町の夫人たちの協力への慰勞として年1回の祭りをタワーズで行う点に表れている。小説冒頭の第1、2章はそのような情景を詳細に描いている。

次にスクワイアの地位にあるハムリー家を見ていこう。カムナー家がタワーズを中心に、ホリングフォードを含む州地域全体を治めている印象を与えるのに対し、ハムリー家には不安定さが感じられる。

まず、ハムリー家は、ホイッグのカムナー家よりもはるかに古い保守トーリーの家系であり、アングロサクソンまたは異教徒ローマ人の到来以前の家柄と言う者もいる(39)。古い家系を誇る保守的な気質のため、産業革命と社会の急激な変化に意識が追いつかない。進取の気性がなく、商売、投資、農業改良、銀行資本、株とは無縁である(40)。この家は、変化の波に乗れず、新時代に没落するのではないかとの印象を与える。ハムリーは父親がオクスフォード大学を卒業できず教育に反感を抱いたせいで、ろくな教育を受けさせてもらえなかった。ゆえに彼には社交性がなく、頑固で暴力的、命令的であるため、地方の名士たちや領民との人間関係が良好ではないのではないかと感じさせる(40)。

しかし、彼は地主としての適格性を欠いているわけではないようだ。本は倉庫に移動し、代わりに書斎にはコート、ブーツ、ゲートル、杖、銃、釣り竿(71)を置いている。この装備品が示しているように、彼の生活様式はいたってシンプルで、ヨーマン(独立自営農民)のようであるという。しかし、このことはマイナスではない。

Their mode of life was simple, and more like that of yeomen than squires. Indeed Squire Hamley, by continuing the primitive manners and customs of his forefathers, the squires of the eighteenth century, did live more as a yeoman, when such a class existed, than as a squire of this generation. There was a dignity in this quiet conservatism that gained him an immense amount of respect both from high and low; he might have visited at every house in the country had he so chosen. (下線は筆者, 40)

ヨーマンは没落してしまっただが、産業化以前の時代、イングランドを支える階層であった。地主のハムリーは18世紀の先祖と変わらぬ簡素な生活を送るがゆえに、威厳を醸し出し、かえって地元の社会から尊敬を集めていた。ギヤスケルの活躍した時期、特に Olden Time のチューダー朝、スチュアート朝カントリーハウスにヴィクトリア朝の理想的ジェントルマンが住む屋敷を想像していたことを我々は序論で見してきたが、そのことが思い出される。その同じ風潮に乗って、当時の人々が保守的なヨーマンの生き方に共感していたことが興味深い。というのは、ヨーマンは強力な文化的磁場を放ち、『ハワーズ・エンド』においても大事な役割を果たすからだ。このような産業化以前の時代、特にエリザベス朝と同一視されることが多いメリー・イングランドに対する尊敬の念はイギリス的である。したがって古風なヨーマン、スクワイア・ハムリーは地主として肯定されているのではないかと考えられる<sup>4</sup>。

さらに地主のハムリーは、社交下手とはいえ、パターナリズムを実践できる人物である。それゆえ領民に慕われ、安定したヒエラルキーに則った秩序が支配している領地であることがわかるエピソードがある。あるとき、スクワイアが元猟場人、老サイラスを訪問する。病氣ゆえに死期の近いことを悟った老サイラスが最後のあいさつをしたいと元主人にお願いしたものである。元猟場人は、封建的な主従関係を大切に思い、それが彼を支えるアイデンティティになっていたことがわかるが、元主人に対する臣下ともいうべきサイラスの思いを受け止めて、コテージを訪問するスクワイアはパターナリズムを実践していると言ってよい。

次に改良の資質のほうはどうか。ハムリー家は代々、農業改良などしないという一家であったが、現地主のハムリーは、荒れ地の排水工事をし、土壌の改良工事を行って土地の価値を高めようとしていた。この改良を適切に行えるかどうかは地主の適格性を証明するものである。ところが長男オズボーンの借金支払いのため、コモンを抵当に入れざるを得なくなり、排水工事は中止、労働者は全員解雇という事態に至っていた(198-99)。理由はどうあれ、改良工事が中断した以上、地主のハムリーは地方の名士としての適格性が疑われてしまう。長男の多額の借金も考え合わせると、ハムリー家の衰退は避けられない。しかしギヤスケルはこのスクワイアに救いの手を差し伸べる。ハムリー家の守り手として、次男ロジャーと、医師ギブソンの娘モリー・ギブソンを登場させるのである。

長男オズボーンは才能豊かで多彩な趣味をもつが、ケンブリッジのフェローにはなれず失意のもと帰還。学生時代の浪費で多額の借金があり、フランス人の子守エ

メーと秘密結婚をして父ハムリー氏を落胆させる。ヴィクトリア朝カントリー・ハウスがモーラル・ハウスの方向に向かっていたことを考えるとこのままではハムリー一家は崩壊する。よってオズボーンは病気で亡くなり、フランス人妻エメーとの間に誕生した息子は最終的にハムリーが受け入れ、ハムリー家を相続することになる。ただし、ハムリーでは新しい時代を生き抜くのは無理なので、ハムリー家の小さな相続人を支える役目は、次男ロジャーと妻になるであろうモリー・ギブソンにまわってくる。ロジャーは、心身健やかにして行いがよい。ケンブリッジで優秀な数学の成績をおさめた前途有望な科学者である。モリー・ギブソンは医師ギブソン氏の娘として、道徳心は強い。このモラルの確かなロジャーとモリーが結婚すれば、19世紀に台頭したプロフェッショナルな階級が地主のハムリー家を救うというきわめて19世紀的な社会の構図がみえてくるであろう。

### III. トマス・ハーディ

ハーディの小説においては、上流階級は居心地がよくない。カントリー・ハウスは否定的に描かれるのがほとんどだ。二、三例をあげよう。『エセルバータの手』(1876)では、ヒロインのエセルバータが玉の腰にのる老マウントクレア卿は、中産階級道徳とは無縁で、情婦をカントリー・ハウスのそばに囲っている、いやらしい老人として描かれている。『テス』(1891)では、アレックの住む、新しい似非カントリー・ハウスと、テスとエンジェルのハネムーン先である、テスのご先祖のカントリー・ハウスが出てくるが、二つとも下層階級のテスを不幸に陥れるものの象徴として否定的に描かれる。しかし、否定されるばかりではなく、カントリー・ハウスが比喩的な意味で肯定される場合もある。『遙か狂乱の群れを離れて』(1874)がそうである<sup>5</sup>。ハーディ初期のパストラル小説の中で、機能不全に陥ったカントリー・ハウスにとって代わるのは、「偉大なる羊の毛狩り用納屋」(Great Sheep-Shearing Barn)である。主人公オウクをはじめとする、田舎の農業労働者たちが作業をするこの場所は、この時代に人気のあったエリザベス朝のカントリー・ハウスにたとえられている(138)。興味深いことに、チューダー趣味はギヤスケルとフォースターにおいても出てくることをつけ加えておこう。

否定の例としてさらに『微温の人』<sup>6</sup>を見てみよう。スタンシー城は准男爵のサー・ウィリアム・ド・スタンシーから鉄道成金のパワー氏、その娘ポーラへと受け継がれており、城は電信が敷設された中世と近代の折衷であり、古き伝統への憧れと科学技術を肯定する上層中産階級が城の住人という状況から物語が始まる。その城の

相続人はすでに上流階級ではない。物語は、ヒロインのポーラ・パワーと、建築家ジョージ・サマセットとの結婚による上層中産階級の興隆か、はたまたド・スタンシー準男爵家のキャプテン・ド・スタンシーとの結婚による上流階級の復活か、を中心に展開する。

まず、ポーラの、ギリシア的陶器の町を作ろうという改良は日の目をみない。城の修復もうまくいかないので相続人として不適格である。キャプテン・ド・スタンシーは、城を長く離れていて準男爵家の自分の先祖をよく知らない人間であり、伝統とは無縁という点で相続人ではない。

ではポーラと恋人のサマセットの組み合わせならば城の正統な相続人になれるのであろうか。これはスタンシー城の火事の場面で明確になる。まずは、ギャラリーに飾ってある祖先の肖像画を描いたイギリスの肖像画家の名前が列挙され、その高い価値が強調された後で、肖像画が燃える場面がはっきりと描かれる。

Five minutes afterwards a light shone upon the lawn from the windows of the Long Gallery, which glowed with more brilliancy than it had known in the meridian of its Caroline splendours. Thereupon the framed gentleman in the lace collar seemed to open his eyes more widely; he with the flowing locks and turn-up mustachios to part his lips; he in the armour, who was so much like Captain de Stancy, to shake the plates of his mail with suppressed laughter; the lady with the three-stringed pearl necklace, and vast expanse of neck, to nod with satisfaction and triumphantly signify to her adjoining husband that this was a meet and glorious end. (下線は筆者, 381)

ギャラリーの肖像画が擬人化され、そのおのおのが、この火事による肖像画の焼失という事態を勝利と栄光であるとして喜んでいる様子がかがえ、スタンシー城が廃墟となる以外の運命はないということがよくわかる。これはポーラとサマセットがスタンシー城の相続人としてふさわしくないことを決定的な形で表現したものである。しかも火つけの犯人がキャプテン・ド・スタンシーの私生児であるデアであるから、貴族・ジェントリー階級が自らの不徳から生み出した人物に自らのとどめを刺されるという構図が見え、上流階級も相続人として不適格であるという物語最初の主張が強化されることになる。ここには、ナショナル・カルチャー、イングリッシュネスを担うものとしてのカントリー・ハウスの消失が見て取れる<sup>7</sup>。

ハーディにおいてカントリー・ハウスが否定的に描かれるのは、70年代以降、



貴族の経済的・社会的体力が減退し、人々の貴族の特権に対する敵意が増しつつあった時代の雰囲気を反映したものであろう。代わりにイングランドを支えるのは『遙か狂乱の群れ』において羊の毛刈りを中世以来、続けてきた田舎の農業労働者たちであろう。ギヤスケルのようにヨーマンに期待することはあまりないようだが、チューダー朝に対する関心の中に両作家を位置づけることができることは記憶しておいてよい。

#### IV. E.M.フォスター

カントリー・ハウスとしてのハワーズ・エンド邸は、ジルアードが言うようなパワーハウスでもモーラル・ハウスでもなく、田舎への憧憬が反映した、小ぶりのカントリー・ハウスである。土地が安心の源だった19世紀から、そうではなくなった20世紀初頭のカントリー・ハウスである。このように地方の権力機構としての力を失い、周りの土地の住民とのパターナルな支配、被支配関係もなくなったカントリー・ハウスを受け継ぐのにふさわしい人間は誰か。まずはハワーズ・エンドの現在の住人、屋敷の様子をみてみよう。

カントリー・ハウス・ポエムのコンヴェンションのうち、ご当主とその夫人を賞賛、特に夫人は場所の精神 (the spirit of the place) であるという点だが、ウィルコックス夫人は確かに場所の精神を表す人物として賛美される。

彼女が登場する場面は、自然の豊饒さに満ちた穀物女神のイメージで描かれている。夫人が音もなく芝生の上を動く様子は人間離れしており、ひとつかみの干し草を持っている様子は豊饒のイメージと言ってよい(19)。近代の移動性そのものである若者と自動車には属しておらず、静止した場所であるハワーズ・エンド邸と榆の木に属している点は、彼女が土地の精神を代表していることを表す(19)。この小説では、カントリー・ハウス作品には欠かせない、先祖の肖像画を飾ったギャラリーはないのだが、その代わりに先祖と過去を大事にするウィルコックス夫人の心の中に、先祖の声が現れて、その声に助けられて、彼女は、ポールの婚約騒動をめぐる争いを鎮めて貫禄を示す(19)。したがって、夫人は場所の精神として、典型的なカントリー・ハウスの女主人の描かれ方をしている。

ウィルコックス夫人は、しかし、物語の半ばで病を得てなくなってしまう。その理由は彼女が近代の科学技術、進歩、民主主義、などについていけない時代遅れの人間で、ウィルコックス夫人の精神性だけではハワーズ・エンドの存続が危ぶまれるからである。

そこでハワーズ・エンドの精神の継承者として、シュレーゲル家の長女マーガレット・シュレーゲルが登場してくる。彼女には父方のドイツ人の血と母方のイギリス人の血がともに流れている。加えて、芸術と文学を愛する教養人でもある(20)。そのマーガレットがウィルコックス夫人に気に入られて、ハワーズ・エンド邸の相続人に指定される。それは彼女が夫人と同様、思考の及ばないものを感じ取る能力、場所の精神を感じ取ることができるからだ。

この能力が衰えていたことは、マーガレットが、ロンドンという都会の慌ただしい生活、引越越し、特に自動車をもたらした「流れの感覚」(the sense of flux)のためにこれまで「空間感覚」(sense of space)を失っていた点に表れていた。しかし、ハワーズ・エンド邸を訪れたことによりその感覚を取り戻す。ハワーズ・エンド邸がイングランドを象徴するものであり、邸を通じてイングランドの理解が進み、島への愛が沸きあがってくるということこそ、彼女が場所の精神を感じ取る能力を持ったハワーズ・エンドの後継者としてふさわしいことを表している(174-75)。このことは、ハワーズ・エンド邸と榆の木の間には親和性があることを彼女が理解していることからわかる。二つは仲間(Comrade)として支えあう関係にある(175-76)。先ほどみてきたように、ハーディの『遙か狂乱の群れを離れて』では、羊の毛刈り用納屋は、中世的なフェローシップの仕事がまだ続いているところなので肯定されており、カントリー・ハウスのイメージを付与されていた。ハワーズ・エンド邸ではそこに住む人々だけではなく、家屋敷と榆の木が仲間として、神秘的な共感性を通じて、ハワーズ・エンドという屋敷と地所を支えていく。

さてマーガレットはハワーズ・エンドを精神的に理解できるだけではなく、後にウィルコックス氏と結婚することからも分かるように、ウィルコックス家のエートスに対する知的な理解も可能な人物である。これが可能でないと、このカントリー・ハウスの維持、存続は難しいだろう。ただ、ウィルコックス家の実利主義はそのまま受け入れられて屋敷の存続に寄与するのではないということはいくつか見てゆくことになる。

ウィルコックス家は、カントリー・ハウスを所有してはいるが、20世紀の中産階級所有のカントリー・ハウスであるから、ジルアードが言うように、パワーハウスとして、領民との間の関係があるわけではない。彼らは実利主義者で、シュレーゲル姉妹とは対極にある。ウィルコックス氏はゴム会社を経営する実業家、帝国主義者である。彼らには、結婚は財産契約、死は相続税である。だが彼らの本質は「パニックと空虚」(panic and emptiness)ではないかとヘレンは否定的だ(22)。し

かし、将来第二のウィルコックス夫人になる姉のマーガレットは、肯定的だ。まずはお金を否定していない。教養と文化に時間を費やす自分たちは、不労所得で得た年収 600 ポンドの島の上に立っている存在と認識できている<sup>8</sup> (52)。「電信と怒り」という物質主義者の世界は現実の力であり、軽蔑できない。それどころか、野蛮を廃絶し文明を形成してきたと言う (88)。だからこそ、ウィルコックス氏の再婚相手となれるのだ<sup>9</sup>。

ところが、ウィルコックス氏に対する肯定的な見方は、ハワーズ・エンドにどのような改良を施してきたかを自ら語る部分を見てゆくことで、修正を迫られ、彼がハワーズ・エンド邸の住人としてはふさわしくないことが見えてくる。

カントリー・ハウス小説のコンヴェンションにしたがって、ウィルコックス氏は、ハワーズ・エンドの歴史 (the history of the little estate) を土地経営者の視点からマーガレットに語る。まずは、過去 50 年間、改良が足りなかった点について語り、いかに遺産が目減りしたか、今では地所のうち牧草地が残っているのみでこれも屋敷同様、抵当に入っているとのこと。そこにウィルコックス氏は救世主として現れ、できるだけ改良を行って、ハワーズ・エンドを守ったことが強調される (175)。マーガレットは改良を行ったヘンリーを頼もしい存在としてみているが、故ウィルコックス夫人は改良を嫌ったのであり、庭よりも大事な放牧地を壊してガレージを作る改良に同意したのも渋々であった (79)。ウィルコックス氏はハワーズ・エンド邸の所有者としてふさわしくないと思われる。それを象徴的に示すのが、その長男チャールズのレナード・バストに対する過失致死事件である。チャールズは懲役 3 年を宣告され、ウィルコックス氏は、失意のあまり男性性を喪失する。

ではどのような人間がハワーズ・エンドを継ぐのにふさわしいか。ヘンリーは、小規模農業の時代は終わり、生産性の高い大規模な集約農業の時代になり、それを担える人間がハワーズ・エンドを継ぐのにふさわしいと示唆する。しかし、小説では、ハワーズ・エンド邸、すなわちイングランドを相続する者は、ヨーマン (自由小土地所有者 (フリーホルダー) または独立自営農民) の末裔であると言っている。

ヨーマンは、アーノルド・トインビーによれば、18 世紀半ばまでは田舎が中心であったイングランドを背負う社会階層であった。特に 17 世紀の内乱では大活躍、ところが名誉革命以後、18 世紀に政治権力と社会的名誉の源である土地を拡大しようとして、貴族やジェントリーら富裕な地主階層は富裕な商人階級との縁組を通じて経済的基盤を強化しながらヨーマンの土地を買いあさった。さらに第二次囲い込みにより共有地 (コモン) を失ったこと、家内工業の衰退により経済的に困窮し

たヨーマンは土地売却を進め、消滅した。このヨーマン階層は、ヘンリーが今では通用しないと、小規模土地所有者であった。その末裔がハワーズ・エンドの相続人にふさわしいと語り手は言うのである<sup>10</sup>。これはどういうことか？

小説中、ヨーマンについての言及は、レナードがハワーズ・エンドを訪れる途中、ヒルトンの町の外に広がる農村地帯に入ったときの牧歌的な風景描写に出てくる。そこでは、ロンドンのオフィスの刻む商人の時間が支配するのではなく、穀物の成長と太陽の運行が支配するパストラルな世界が広がっている。そこで農作業をしているのは最良のタイプとは言えない人間だが自然の循環に従った生活を送っている。彼らこそ、「イングランドの希望」<sup>11</sup>であり、先祖は高貴な家柄で、今でもヨーマンを生み出すことができるのだ(276)。

さて、レナードの横を通り過ぎる自動車に乗っている者たちは、ヨーマンの末裔以外の後継者の可能性を示す。それはウィルコックス氏のような帝国主義者であり、イングランドの大地 (the earth) を継ぐ野望をもち、健康で活動的、ヨーマンと同じく急激に繁殖する可能性があり、超ヨーマン (super-yeoman) としてイングランドの徳を海外に伝える役目をする。しかし、実際にはコスモポリタニズムの輩なので、豊饒の大地ではなく灰色の不毛の大地を継承する、イングランドの田舎の破壊者となってしまう。したがってハワーズ・エンドを相続できない(276)。それに引き換え、道の傍らをハワーズ・エンドへと向かって歩くレナード・バストはたとえ死が待っているにしても、ヘレンとの間に生まれた子供がマーガレット亡き後は、ハワーズ・エンドを相続するということか物語の最後に決まる。このことは何を意味するか。

そもそもレナードは保険会社の事務員で、下層中産階級に属する。しかし、祖母は農業労働者かその類で労働者階級に属し、両親は商売人、義兄がセールスマン、実兄は国教会の信徒礼拝奉仕者なので中産階級家庭に育ったのであり、そのような係累をもつレナードが上層中産階級のヘレンとの間に子供を残す。その子は、複数の階級の素質が融合、継承され、新しいイングランド国民の原型となるのではないか。その素質とは、労働者階級、下層中産階級、上層中産階級の素質なのだが、上層中産階級の素質には、マーガレットとヘレンのドイツ人の血に加えて、リベラルな教義主義的要素と、ウィルコックス家の実利主義的要素もその子の成長とともに注入されるはずである<sup>12</sup>。しかも小規模ながら牧場や農地の保有が示唆されており、ヨーマンの復活と言ってもよい。ただし、18世紀末に消滅した無教養で保守的なタイプではなく、新しい状況に対応できる、しかし過去との絆も大切にする新

ヨーマンの誕生である。フォースターの有名なモットー「たた結びつけよ」(Only Connect!) の意味とは上のような異種の要素の結びつきのことではなからうか。フォースターは評論“Challenge of Our Time”において、文化の維持には、これまで白人特権階級のみが享受していた文化資本をすべての階級、人種が利用できるようにすべきだと唱えている (*Two Cheers* 67-71)。新ヨーマンはフォースターのそのような理想を具現化したものと言えよう。

## V. 結論

『エマ』のヒロインのエマは、孤児のハリエット・スミスがヨーマンのロバート・マーティンと結婚するのを阻もうとするほど、ヨーマンを階級的に見下して嫌悪感を露わにしていた。オースティンの時代は、ちょうどヨーマンが消えたと言われる時期にあたる。その後、世紀半ばのギヤスケルでは、カントリー・ハウスの相続人はパターンリズムと改良を实践する貴族、ジェントリー階級であることには変わりはないが、社会の変化に対応するため、新しく台頭してきたプロフェッショナルな人間の力を借りる時代に入る。その上で、ヨーマン的な地主のハマリーが肯定されているのだが、これはチューダー朝に対する憧れが根底にあるようだ。ハーディでは、農業不況の反映か、貴族とカントリー・ハウスにかつての威勢はなく、ヨーマンよりも身分が下の農業労働者が仲間として共同で働く姿 (フェロウシップ) にイングランドの理想の姿をみており、これはヴィクトリア朝の中世趣味が色濃く出たものとみてよいだろう。チューダー趣味の方も羊の毛刈り用納屋がエリザベス朝カントリー・ハウスにたとえられる点に残っているとさえ言えよう。フォースターになると、複数の素質が混合した多様性を表象した新しいヨーマンが相続人であり、チューダー朝メリー・イングランドへの期待を表している<sup>13</sup>。ハイブリッドなヨーマンこそ、フォースターが夢みるイングランドの相続人、そのアイデンティティなのであろうが、1914年に始まった第一次世界大戦はそれを打ち砕いてしまった。そして現在も、多様性を是とするイギリス的価値観はテロによる揺さぶりをかけられている。

## 注

\*本稿は、日本ギヤスケル協会第28回例会(2016年6月4日、岐阜県立看護大学)において行った講演に加筆修正を施したものである。

1. Englishness については、Colls, Dodd, Kumar が必読書である。
2. カントリー・ハウスを扱ったものとしては、短編「モートン・ホール」（鈴木美津子論文を参照）と中編『ラドロー卿夫人』もある。前者は名誉革命以後、貴族階級が衰退し商人階級がのしあがっていく様を三代にわたって観察したものである。それに対し後者は、保守的な古い体質の上流夫人が、新しい時代の考えと若い世代を受け入れてゆく姿を共感をこめて描いている。
3. Karen Boiko は、本作品が人々を分類するにあたり身分 (rank) から階級 (class) へと移行しつつある時代を扱っていると指摘しているが、パターンリズムというときには、産業化と都市化が進んで階級間対立が存在し始める時代にあっても、18世紀までに見られたランクによる社会的ヒエラルキーが調和をもたらしている世界がまだ存在しているということになる。また、Alun Howkins は、19世紀半ばにパターンリズムが復活した点を指摘している (*Reshaping Rural England* 74-75)。
4. 手紙の中に 'yeoman' という語が出てくるのは一カ所のみ、本小説の構想をジョージ・スミスに説明する手紙の中でスクワイアを 'yeoman' と呼んでいるが、作者のヨーマンに対する思い入れまでは確認できない (May 3rd 1864). J. A. V. Chapple & Arthur Pollard, p. 731.
5. 講演では、『遙か狂乱の群れを離れて』について詳細な分析を行ったが、字数の関係から、一部を紹介するにとどめる。
6. 作品論としては、新妻論文、森松論文を参照。
7. 小説だけではなく詩にまで対象を広げてイングリッシュネスを論じたものとしては、Whitehead を参照。ハーディのウェセックスを通じた国民文化形成の問題については、Widdowson (1989) 55-71 を参照。
8. シュレーゲル家のような不労所得収入者とその投資先の問題については、Delany を参照。
9. シュレーゲル家の教養主義はリベラル・ヒューマニズムの価値観を体現しているのだが、ここでは物質主義と実利主義を批判する価値観が実は資本主義に支えられているという逆説をマーガレット自身が認めていることになる。フォースターのリベラル・ヒューマニズムおよびマシュー・アーノルドの影響については Widdowson (1977) 第3章を参照。また、リベラル・ヒューマニストが私的で安全な立場から、貧困という都市悪、公的な問題を高見の見物をしていることに伴う彼らの罪意識については、Born 論文を参照。
10. ヨーマン層への期待の復活については、丹治愛論文を参照。
11. 小土地所有者を政策的に作り出し、田舎に人々を送り込むことで田舎の復活を後押ししようという「土地へ還れ」(Back to the Land) 運動については、Jan Marsh を参照。
12. ウィルコックス家の血自体はその子供に流れてはいないが、マーガレットを通じて、リベ

ラリズムの経済的基盤を肯定する考え方は継承されるであろう。Delany は、結末にマーガレットとヘレンがヘンリーと子供を“nurture”する姿を読み取っているが、上記のような考え方の継承については触れていない。

13. 世紀末におけるチューダー趣味の復活については、Alun Howkins (2014) を参照。また、C. F. G. Masterman とフォースターの関係、ヨーマンの関係については、Peter Widdowson も触れている（第二章）。新しいヨーマンがこの時代に誕生したという歴史的現実については、歴史学者 Day の本が詳細に論じている。

#### 引用文献

- Boiko, Karen. “Reading and (Re) Writing Class: Elizabeth Gaskell’s Wives and Daughters.” *Victorian Literature and Culture* 33 (2005): 85-106.
- Born, Daniel. “Private Gardens, Public Swamps: ‘Howards End’ and the Revaluation of Liberal Guilt.” *Novel: A Forum on Fiction*. 25.2 (1992): 141-59.
- Chapple, J. A.V. & Arthur Pollard, eds. *The Letters of Mrs Gaskell*. Manchester: Manchester UP, 1966.
- Colls, Robert. *Identity of England*. Oxford: Oxford UP, 2002.
- Colls, Robert and Philip Dodd. *Englishness: Politics and Culture 1880-1920*. 2nd ed. 1986. London: Bloomsbury, 2014.
- Day, J. Wentworth. *The New Yeomen of England*. London: George G. Harrap & Co. LTD, 1952.
- Delany, Paul. “Islands of Money: Rentier Culture in E.M.Forster’s *Howards End*.” *English Literature in Transition*. 31.3 (1988): 285-296.
- Forster, E. M. *Howards End*. London: Penguin Books, 2000.
- . “The Challenge of Our Time” in *Two Cheers for Democracy*. London: Edward Arnold, 1951. 67-71.
- Gaskell, Elizabeth. “Morton Hall.” *The Moorland Cottage and Other Stories*. Ed. Suzanne Lewis. Oxford World’s Classics. Oxford: OUP, 1995.
- . *My Lady Ludlow. My Lady Ludlow and Other Stories*. Ed. Edgar Wright. Oxford World’s Classics. Oxford: OUP, 1989.
- . *Wives and Daughters*. Oxford World’s Classics. Oxford: Oxford UP, 2000.
- Giles, Judy and Tim Middleton, eds. *Writing Englishness 1900-1950: An Introductory Sourcebook on National Identity*. London: Routledge, 1995.

Girouard, Mark. *Life in the English Country House: A Social and Architectural History*. New Haven: Yale UP, 1978.

Hardy, Thomas. *A Laodicean: A Story of Today*. London: J. M. Dent, 1997.

———. *Far From the Maddening Crowd*. New Wessex Ed. London: Macmillan, 1974.

———. *Tess of the d'Urbervilles*. New Wessex Ed. London: Macmillan, 1974.

———. *The Hand of Ethelberta*. New Wessex Ed. London: Macmillan, 1974.

———. *A Laodicean: A Story of Today*. 1881. London: J. M. Dent, 1997.

波多野葉子「父親の温情主義——レディ・パターナリストの変容——」松岡編所収。383-400

林文代編『英米小説の読み方・楽しみ方』岩波書店、2009。

Hoskins, W. G. *The Making of English Landscape*. Harmondsworth: Penguin Books, 1985.

Howkins, Alun. *Reshaping Rural England: A Social History 1850-1925*. London: Routledge, 1992.

———. “The Discovery of Rural England.” In Colls & Dodd. 85-111.

“Improvement.” Def. 2-b. *The Oxford English Dictionary*. 21 June. 2017. <<http://www.oed.com/view/Entry/92858?redirectedFrom=improvement#eid>>

Kelsall, Malcolm. *The Great Good Place: The Country House and English Literature*. New York: Columbia UP, 1993.

Kumar, Krishan. *The Making of English National Identity*. Cambridge: Cambridge UP, 2003.

Mallet, Phillip. *Palgrave Studies in Thomas Hardy Studies*. London: Palgrave Macmillan, 2004.

Mandler, Peter. *The Fall and Rise of the Stately Home*. New Haven: Yale UP, 1997.

Marsh, Jan. *Back to the Land: Pastoral Impulse in England from 1880 to 1914*. London: Quartet. 1982.

森松健介「<イギリスの状況小説>——『微温の人』」、森松健介『テキストたちの交響詩』（中央大学出版部、2006）所収 201-18.

松岡光治編『ギヤスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化』広島：溪水社、2012年。

新妻昭彦「『微温の人』の位置と意義」、日本ハーディ協会編『トマス・ハーディ全貌』（音羽書房鶴見書店、2007）所収、150-62.

Roberts, David. *Paternalism in Early Victorian England*. New Brunswick, New Jersey: Rutgers UP, 1979.

Smith, Anthony. *National Identity*. Reno, Nevada: Univ. of Nevada Press, 1991.

鈴木美津子「女性虐待——監禁、凍死、餓死、抑圧的な女子教育」松岡編所収、329-345.

丹治愛「『ハワーズ・エンド』の文化研究的読解——都市退化論と「土地に還れ」運動——」林文代編、115-134.

トインビー、アーノルド、塚谷晃弘・永田正臣訳『英国産業革命史』東京：邦光書房、1953.



Whitehead, James S. "Hardy and Englishness" in Mallet, 203-228.

Widdowson, Peter. *E.M.Forster's Howards End: Fiction as History*. London: Sussex UP, 1977.

———. *Hardy in History: A Study in Literary Sociology*. London: Routledge, 1989.

(西南学院大学教授)

Abstract

Transformation of 'Home' in the Country House:  
Mrs. Gaskell, Thomas Hardy, E.M. Forster and Englishness

---

Yukio KANEKO

---

The three novelists we discuss, Mrs. Gaskell, Thomas Hardy and E.M. Forster, representing the Victorian and Edwardian age, are all concerned with "the Condition of England," or the problem of social change, especially in the countryside, which the industrial revolution, modernity, urbanization, and the British Empire have produced. The countryside being an essence of Englishness, this article traces the change in the representation of the country house conceived as "home," an element of national identity. *Wives and Daughters*, *A Laodicean* and *Howards End*, all address the problem of who will inherit the country house and what qualifications are necessary as an inheritor. The inheritors should carry out paternalism and excel in improvement for the village welfare. In *Wives and Daughters*, Lord Cumnor and Squire Hamley can both cope with the social change and manage their estates in hierarchical harmony although the latter needs the aid of the rising professional class. Thus the upper-class is stable in the moral country house. In *A Laodicean*, the Stancy Castle, from which Sir William de Stancy has been displaced, is owned by Paula Power, a wealthy upper-middle class girl. But considering her failure in estate improvement and the symbolic castle ruined in a blaze, the upper-middle class cannot inherit the country house, either. Elsewhere Hardy suggests that the agricultural workers seem to replace them as inheritors. In *Howards End* the estate is inherited by the illegitimate son of Helen Schlegel and Lennard Bust. This means the inheritor's hybrid character: agricultural workers' class, commercial middle class, liberal-humanist and philistine upper-middle class, and German/English bloods all melt together. It is worth noting that all the novels have in common the contemporary attachment to yeomen and the Tudor England.